オホーツク文化の骨斧・骨筢・骨鏜

| その他のタイトル | オホーツク文化の骨斧・骨筢・骨鏜
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>山浦 清</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>東京大学文学部考古学研究室研究紀要</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ベージ</td>
<td>151-166</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1982年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15083/00029674">http://doi.org/10.15083/00029674</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
オホーツク文化の骨斧・骨篍・骨鈍

山浦 清

はじめに

樺太・北海道・千島列島に広がるオホーツク文化については、近年、調査・研究ともに活発な状況を呈している。日本列島史文化の内でも、その海獣狩猟技術の特異な発達により、その狩猟・漁撈具の研究には注目すべき考察が多い（前田，1974；大塚，1976；後藤，1981）。しかしながら、その遺跡より出土する多種多様な骨角器の中で決して少なくない骨斧・骨篍・骨鈍と称されるものは今日まで顕著であることはあくまでもというのである。そこで本論では、これら骨斧・骨篍・骨鈍について、その地域性・時代性・用途、さらにそれからの解析・研究について考えてみた。

I 資料概観

オホーツク文化遺跡の調査例はかなり多いが、ここでは骨角器を多量に出土し、それぞれの遺跡における骨斧類の数量組成について検討可能な例を中心として見ていくことにしよう。

① 礼文島香深井遺跡（大場他編，1976・1981）

当遺跡は十和田期から父島期にかけての遺跡であるが、主体をなすのは刻文期の資料である。全部で1084点の骨角器が出土し、その内、掘が木具として191点（17.6%）が報告されている。この数は銘銘の83点（7.7%）、鉤針台141点（13%）に比較しても、遅れないと言えよう。勿論、遺物の残対群は、それぞれの使用法等によって左右されるわけであるが、例えば当遺跡馬骨の1 m²中、掘が木具は平均2.6点出土するという（市来，1980：598）。この数は他の遺跡器の3〜10倍に達しており、骨斧類が彼等の日常生活において多用されていたという事実を示していう。

ところで、これら掘が木具はA〜Cと分類され、さらにBはB I〜B IVと四細分されている。

掘が木具A（図1—1）は、長さ14〜60cmの偏平棒状で、その一端、又は両端を薄く、平らに削って刃部を作ってしたものだという。鱗骨製、全部で15点出土している。

掘が木具Bとされているものが、従来、骨斧・骨篍・骨鈍とされているものである。大形鱗の肋骨
山浦 泰

頭蓋骨製である。B I は刃部幅が 7 cm 未満のもの（図 1 - 2．3）、B II は 7 cm 以上ものである（図 1 - 4～6）。柄上端部に一定の対称的な突起を有するが、柄側縁にも突起を持ちものの（同図－5）、あるいは対称的に柄側縁がくの字を呈するもの（同図－6）も見られる。B III は一対（同図－7）、又は二対の窪（同図－8）を持つものであり、二対の窪を持つものは柄が見られない。B IV は（図 2－1）、一個の窪を有するものであり、当遺跡で一点出土しているだけである。B I は 33

図 1 香深井遺跡出土の骨斧類（1）：大場他編（1976，81）より
オホーツク文化の骨斧・骨鱗・骨鏃

図2 香深井遺跡出土の骨斧類(2): 大場他編(1976, 81)より

点、BⅡ91点、BⅢ26点であり、全部で167点と、掘り具の87.4％に達している。

掘り具Cは、ギンドゥクジラ・トドの肩甲骨の両側を残して、中央部を刻り落し、その一端を尖頭状に作ったものであり（同図－2）、9点出土している。

ところでは、掘り具A、Cとされたものは、少数ながら、各時期にわたって見られるようであるが、Bが一般化するのは当遺跡の魚骨層V以後のようである。第IV層でBⅠ、BⅡ、BⅣが揃い、魚骨層IV以後にはBⅠ～BⅢがセットとして確立する。そして魚骨層Iにおいては、掘り具は全骨角器中の44％（Bのみでは41.3％）に達するのである。

掘り具Bの内において、刃部最大幅の出現頻度をとった時、最も多きのは11cm台であり、13cm台にもう一つのピークが存在するようである（表1参照）。又、当遺跡の資料中、後述するような骨斧に類するものが明らかに少ない点も興味深い事であろう。

② 網走モヨロ貝塚（大場, 1955）

当遺跡においては、米村（1950, 57）によれば、数百点にのぼる骨斧類が発見されているという。ここでは、大場（1958）の発表した資料を基礎として考えて見よう。これらは、主に刻文期から貼付浮文期のものとしてよいであろう。

骨角器として、完形品（やや完形を含む）919点、不完全品316点、未完形品288点、縄文1523点が採集されているが、この内、骨斧25点、骨鱗266点、骨鏃32点、計323点と、全骨角器の21.2％に達する。素材は香深井遺跡同様、ほとんどが鯨骨製である。

ところで骨斧・骨鱗・骨鏃の分類は報告者の指摘するように（大場: 1958, 224）明確なものではないが、骨斧というのは（図3－1・2）、厚手で、刃部は幅が狭く、尖刀を有するという。有角・有肩のもの、さらに両端に刃部を持つものも見られる（同図－2）。骨鱗とされるものは（同図
図3 モヨノ貝塚出土の骨斧類：大塚（1955）より

—3～6）香深井遺跡における掘り具BⅠ・BⅡにあたるものである。骨斧同様、両頭のものも見られるが（同図—3）、多くは一端のみを刃部としている。有角のものが多いため（同図—4・5）、香深井遺跡と異なるところであろう。骨器とされているものは、刃部幅の広いものであり（同図—7）、香深井遺跡のBⅡ、BⅢにあたる。ただし、当遺跡では二対の帯を持つものは、知られていないようである。

この他に当遺跡では図示されていないが、骨柳・骨製打器とされているものが少数見られるようである。前者は骨箔・骨鐮の破損品の再生品等であり、後者は香深井遺跡の掘り具Aに近いもの
オホーツク文化の骨斧・骨箒・骨鉄

のようである。

香深井遺跡との対比で当遺跡の特徵を見るならば、第一に骨斧とされるものが目につくこと、第二に香深井遺跡では骨箒が骨斧類の17.8%存在するが、当遺跡では9%以下であるということである。

この点を関連して、当遺跡の骨斧類の刃部幅の頻度を見てみると（表1参照）、4cm台がもっとも多く、次に8cm台に二つ一つのピークが予想される点である。香深井遺跡とはこの点対称的である。

③ 根室トーサムポロ貝塚（北橋，1953）

出土点数は少ないが、当遺跡は、道東部刻文期の単純遺跡であるので、その資料を見ておくことになる。

香深井遺跡では掘り具Aとされるであろうが、icepickとされるもの2点（図4－1.2）、骨斧・骨箒とされるもの十数点（同図－3－5）、骨鉄2点（同図－6）が報告されている。

これらの資料中、興味深いのは、骨斧・骨箒とされるものの内に、側縁部に非対称的な突起を有するものが認められる点である（同図－3）。モロ音貝塚にも認められるようであるが、香深井遺

跡には存在しないようである。ただし、後述するオンネモト遺跡と比較すると、骨鉄が見られる点で香深井遺跡に近い。土器文様においても知られるように、刻文期においては、道北・道東とも文化要素の上で類似点が多いと言えよう。
山浦 清

④ 根室オンネモト貝塚（国分他編，1974）

当遺跡は道東部貼付文期の代表的遺跡であり、その貝塚からは、骨斧・骨鐮として41点の遺物が報告されている。これらの資料を一見したとき（図5参照）、次の点が気付かれるであろう。第一には骨鐮が見られないことであり、第二に有角の骨剣とも言えるような骨鐮類（同図4～6）が目につくことであろう。その他に、骨斧としえるような厚手、刃部の狭いものも多い（同図1～3）。

図5 オンネモト貝塚出鏡の骨鐮類：国分他編（1974）より
オホーツク文化の骨斧・骨鏃・骨銛

当遺跡の刃部幅の頻度は（表1参照）4cm台であり、香深井遺跡とはその様相がかなり異なる。

以上、道北から道東にかけての諸遺跡における、「掘り具」骨斧類の様相を見てきたわけであるが、個々の遺跡の特徴点を別として、次のような所見を得ることが出来よう。即ち、香深井遺跡の層位から見ると、十和田期・刻文期にこれらの利器が一般化するということが、そして、道北部においては、骨斧としえるものが少なく、骨銛が多いという事である。一方、道東部においては、骨斧・骨鏃とされるものが多く、貼付浮文期になると骨銛とされるものが少なくなるか、認められなくなるということである。こうした点は刃部幅の頻度に端的に表われており、道北では刃部幅11cm台のものが最も多く、道東部においては4cm台のものが多いという対比を示すわけである。

表1 骨斧類刃部幅頻度表
それでは、これらの道具はどのようにして使用され、上記のような所見の背景として、如何なることが考えられるのであろうか。

Ⅱ 柄の装着法

骨斧・骨箒・骨鍬といったものは、やはり木製の柄を取付けて使用したのであろう。従って、今まで、それらの柄部とした部分は、正確には柄取付け部とすべきであろう。柄の取付け方に関しては、若干の資料が、その推測の基礎となる。図1—2、図3—2等は骨斧、図3—3は骨箒とされるものであるが、これらは両端に刃部を有する例である。こうしたものは、一方の刃部が摩耗したために、他方に刃部を作り出したと考えるよりも、本来的に両端刃部を作っておき、その時々において、一端を使用したと考えるべきであろう。さらに、柄取付け部の断面形を見るならば、一般的には、カマボコ状を呈するものが多く、骨の縫密質の部分が、若干張り出し、海綿質の部分が平らに作られているのである。こうした点も考慮するならば、一般的には、鍬のように柄を取付けたと考え方がよいと思われる。さらに香深井遺跡出土の掘り具BⅣ（図2—1）は、明らかに鍬のようにして使用されたと考えられるわけであり、掘り具BⅢとそれとの類似性、さらに骨箒と骨箒との関連よりするならば、骨斧類すべてに、同様の取付け法を推測することが順当であろう。

一方、香深井遺跡で、掘り具Cとされたものは（図2—2）、アイヌ民族におけるシュッタップのように（図7—4）、そのままの形で使用されたと考えるべきであろうが、彼等の海草取の絵に見られるように（図8—1下）、長い柄を付けた可能性もある。

香深井遺跡の掘り具Aとされたもの（図1—2）、あるいはトーサムボロ貝塚でice-pickとされたもの（図4—1・2）等は、そのまま手に持って使用されたこともあろうが、やはり、上述のように柄を付けて鶏鳴状に、あるいは、杖状に柄を取付けたのであろう。

Ⅲ 骨斧類の用途

これらの利器の用途については、今日までに色々な意見が提出されている。それらをまとめると次のようになる。

① 土掘り具
② 雪かき
③ 氷割り
④ アワビおこし
⑤ 海草取り

これらの利器には、破損後に再生して使用している例も多く、骨斧・骨箒・骨鍬といったものが、それぞれ明確に使い分けられ、形態と用途の上で、一対一の対応関係が存在したと考えるよりも、色々と転用されることもあったと考えるべきであろう。ここでは、北方諸民族の例を見ながら、その用途について考えてみたい。

158
オホーツク文化の骨斧・骨轆・骨釘

骨斧等とされるものに、形態上、最も近いのは、エスキモー等の使用するmattockと言われる土掘り・水割り等に使用する万能具である（図6—1）。これより刃部幅の広いものが雪橇であり（図図—2）、幅の狭いものが骨斧である（図図—3）。後者は水割りや、凍った肉を打ち割ったりするのに使用するという。こうしたmattock等に類似する遺物は、北欧の先史遺跡においても発見されており、Clark（1947）は鯨等の解体に使用したと考えている。

図7—1はチャクチの土掘り具である。穴を掘る時に使用するという。形態の上で、オホーツク文化的骨斧に似ている。図7—2・3は、チャクチ、コリャークが野生植物採集に使用するroot-pickである。この形態は、アイヌ民族の植物採集用具シッタップ（図7—4）に類似して

図6 エスキモ使用の骨斧類
Boas（1901）より
1. 長さ 27.5cm
2. 〃 24cm
3. 刃部長 39cm

おり、香深井遺跡の掘り具C、さらにAの用途を想像させる。

アイヌ民族においては、植物採集に、シッタップ以外にプイタウライニ、イタニ等という掘り棒が使用されたようであるが（林：1967、164）（図8—上参照）、香深井遺跡掘り具A、トーサムポロ具壷でice-pickとされたものの用途を考えさせるものである。

また、これらの利器は海で使用された可能性も考えられる。前述したように、海草採集用の竿と
図 7 北方諸民族使用の骨器類
1, 2 : Bogoras（1904）より
3 : Jochelson（1908）より
4 : 知里（1953）より

して（図 8 附）ある人は、骨笛とされるものはアツビおこしとしての使用も考えられるのであら
る。3）

表 2 骨斧類と用途の関連性

<table>
<thead>
<tr>
<th>用途</th>
<th>利器</th>
<th>用部幅</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>植物採集</td>
<td>香深井镐り道具 A</td>
<td>狭</td>
</tr>
<tr>
<td>（海草採集）</td>
<td>C</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>氷割り</td>
<td>骨斧</td>
<td>広</td>
</tr>
<tr>
<td>肉解体</td>
<td>骨笛</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（あわびおこし）</td>
<td>土掘り</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>（雪かき）</td>
<td>骨鎚</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

以上、いくつかの民族誌例を見たが、これらを表化すると次のようになろう（表 2 参照）。

勿論、こうした関連性は、全て可能性ということであり、実際のように使用されたとは考えにくい。例えば、骨笛を上述のように鋳形に柄を装着するならば、アツビおこしとしての使用には問題がある
図8 アイヌの生活：泉（1968）より
う。さらに，香深井掘り具Cとされたものの先端部の摩耗，骨破刃部の摩耗を見るならば，それそれぞれ骨草採集，雪かきという用途も考えにくいのである。しかしながら，これらの用途の可能性よりするならば，Ⅱで得られた所見について，説明しうる点もある。例えば，道東部オホーツク文化遺跡において，骨斧類が目に付くという点は，冬期，流氷の接岸を見る道東の自然環境によって説明出来るであろう。即ち，流氷部での狩猟漁獲活動において，氷割りその他のために骨斧が使されたのである。

それでは，道北部に多い掘り具と考えられる骨斧の用途は具体的に何であろうか。一つには，堅穴・墓を掘るために使用されたと考えられる。しかし，その出土数点よりするならば，日常的に例えば植物採集に使用されたと考えることが出来る。北海道アイヌにおいては，食用として，オオウサギ・行者＝ノニク・ニリンソウ・ヤブマメ・エゾエンソサク・ヒシ等が採集されていたが（林，1967：159），ツチマメの採集にはシップソウ，ヤチブキ・ウザギリ・カタクリの根の採集にはビタウライ＝イタイ=が使用されていたわけである。こうした植物採集は，女性を中心とした春から秋にかけての仕事として，樺太アイヌ（山本編著，1979：66〜77），ギリャーク（タカシマ，1975：45），チェケチ（ボゴラス，1904：97〜99），コリヤーク（ジョシェルン，1908，577）等にも知られ，カロリーの上での全食料に占める割合は少ないと考え，栄養バランスの上で，貴重な意味を持っていたと言えよう。そして，こうした植物採集が，オホーツク文化人においても行なわれていたことは，容易に想像されるわけではない。しかしながら，それらは民族誌例に見られるように，香深井遺跡掘り具A・Cといった道具によって，十分可能なわけである。従って，オホーツク文化人が骨笛，さらには骨斧によって，植物採集を行なったと考えるにしても，道北・道東における植物採集の具体的内容がそれほど異ならないならば，植物採集という用途からだけでは，Ⅱで得られた道北・道東の地域差は十分には説明されていないのである。それには，また，別の視点が必要のようである。

Ⅳ オホーツク文化的農耕民的要素

道北といっても，今日の段階で十分な資料が報告されているのは，香深井A遺跡だけであるが，この魚骨層IV直前の第2号堅穴以後，全ての層からブタの骨が出土している。全部で952点，推計最少個体数は，成年25頭，若年10頭，幼年17頭という（西本，1978：3）。ノンの推計最少個体数，成年129頭，若年12頭，幼年43頭に比較すれば少ないのが，幼年より成年までの骨が出土している点からして，報告者の説くように，道北オホーツク文化遺跡において，ブタの飼育が行なわれていたことは確かであろう。言うまでもなく，ブタ・イヌシといった動物は，北海道に棲息していたわけではないが，アムール川流域・沿海州・中国東北地区に広く分布するとともに，それらの地域において古くから飼育されていたようである。例えば，朝鮮半島北部の樺目文文化後半（B.C. 3〜2千年紀初），沿海州のヤンコフスキー文化（B.C. 1千年紀前半），沿アムールのボリツェ文化（B.C. 1千年紀〜A.D. 4世紀）等において，アワ・ヒエ等の雑穀，豆類の栽培とともに，ブタ

162
オホーツク文化の骨斧・骨鍬・骨鐮

の飼育が行なわれていたことは、加藤（1976～1981）、後藤（1981）氏等が指摘されているところである。さらに、オホーツク文化と深い関係を持つとされるアムール川流域の、ソ連考古学者の説く「靺鞨文化」においても、キビ・コウリオン等の栽培とともに、ブタ飼育が行なわれていたことは、菊地俊彦（1976：88～90）、栄本（1978）氏等が説かれているところである。

さらに、オホーツク文化との関連が考えられる中国史書に知られる民族、例えば、把䱻、勿吉、靺鞨、黒水靺鞨において、アワ・ムギ等の栽培とともに、ブタが多数飼育されているという記述が認められるのである（菊池徹夫、1979：440）。

一方、民族誌よりするならば、オホーツク文化人とも言われることのあるギリャークにおいて（菊地俊彦、1978）、今日ブタ飼育を行なっていないが、イノシシ・ブタについて、それぞれ「アヤカラン」、「オロホン」という言葉が存在するという（大橋、1960）。オロッコにおいても、イノシシは「ナーショイ」、ブタは「オルディー」という（大橋、1960）。さらに、アムール川流域から松花江にかけて居住するゴルディ族は「魚皮窯子」と称されるように、サケ魚を基本的生業とする民族であるが、雑穀類の栽培とともにブタ飼育を行なっているのである（Lattimore, 1933：30～33）。

このように考古・文献・民族資料を見て来たと、上述の地域において、ブタ飼育と雑穀豆類栽培が一つの文化 complex として存在したと考えられるであろう。これは、一つには、養性的ブタ飼育の前提として、飼料供給の問題が関係するためであろう（林田、1971：15）。ゴルディ族におけるブタ飼育は不明であるが、アムール川上流、松花江支流黒龍江流域に住む蒙古系のダウール族（達幹爾）族においては（池尻、1943：246）ソバの未熟の穂を摘んで乾燥したものを煮沸し、それに残飯・小麦粉・ヌカ等を混ぜて与えるという。一般的に、これらの地域においては、大麦・ソバカス・フスマ・トウカセ・ヌカ・サケカス・野菜類等を飼料としている（守田、1906：192）。

以上の点よりするならば、道北オホーツク文化におけるブタ飼育の存在は、同時に、道北オホーツク文化人による雑穀・豆類栽培を意味するのではないだろうか。そして、この事によって、耕起、砕土、整地のための、さらには、豆類の収穫のための道北における骨器のあり方も説明されるように思われる。正しく、ブタ飼育が明確となる香深井遺跡IV層において、骨斧類もセットとして出現することである。

おわりに

骨斧類の分析から出発して、上記のような結論に至ったが、従来説かれてきたオホーツク文化像とは、かなり異なったものとなってしまった。香深井遺跡においては、ブタの飼料として、当遺跡における主要自然遺物である魚類が考えられている（西本、1978：12）。しかし、一般的に言って、魚類だけでは、栄養の上からブタ飼育は困難である（江蘇農学院、1978：68～70）。大陆側からの新たなブタの導入を考えるとしても、十和田期・刻文期から盛線文期にかけての対断のない飼育は、ブタ飼育が、道北オホーツク文化人の生活体系において、不可欠の、しかも安定した要素であった。
ことを示すのであろう。そうした点からも，雑穀・豆類の栽培を考える必要がある。
そこで，その耕地という問題であるが，例えば，礼文島におけるオホーツク文化の大きな遺跡
である香深井遺跡，浜中遺跡といった例は，それぞれ香深井川，ポロナイ川の川口に位置している。
さらに福木では，スヤ川口にあるスヤ貝塚等の例を見る時，それらは，川を流れ上するサケ・マ
ス魚の上で有利ということもあるが，それと同時に，アイヌにおけるように（林，1969：25〜27）,
その川岸等を耕地として利用したのであろう1)。
道東オホーツク文化においては個別的なブタの導入が行なわれたとしても，そうした生業体系が
維持されなかったのは，何故だったのであろうか。一つには，西本（1978：12）の説くように，ブ
タ飼育用となるほどに，道北に比して魚類が獲れなかったことも，その一要因かもしれない。しか
しながら，基本的には道東部オホーツク文化の変質に伴なう現象と考えるべきであろう。特に，流
氷域における海獣狩猟文化としての性格を明確化することにより，本来の漁撃・ブタ飼育・農耕民
からの脱皮に伴なった現象として理解されるように思われるのである2)。
最後ではあるが，筆者は，道北オホーツク文化人の農耕民の要素を過大に評価するものではない。
カリッリ的には漁撃活動が主であり，雑穀・豆類栽培，ブタ飼育は女性の仕事であったろう。しか
し，それらの要素を残存的ながらも保持し続けた点は，オホーツク文化成立・発展過程を考える上
で，考慮しなければならない点であろう。

付記
本論は昭和56年度科学研究費総合研究（A）「北太平洋沿岸海獣狩猟文化の研究」（代表：大塚和義）
による成果の一部である。

註
1) 本論中で「骨鰭類」とするのは骨斧・骨槓・骨銠等の総称とする。
2) オホーツク文化の時期区分については諸説あるが，本論では，十和田期→刻文期→沈流文期，そして道東
部では沈流文期に並行して後付浮文期と考えておきたい。
3) 報告図版を見ると，骨斧をとえるものは本論図1-2のみのようである。
4) 大場（1958）は骨斧として窓のないものも含めているわけであるが，本論叙述においては窓を持つものの
と骨槓とする。
5) 米村（1950）の PL 54, 55参照。
6) この香深井遺跡魚骨層Ⅳは，極端に見えるならば，十和田期・刻文期とされよう。
7) こうした用途は，大塚和義が，岡崎（1973）の論文を基礎として北海道大学オホーツク文化シンポジウム
（1977年）の席上発表されている。
8) 具体的には，下水の魚を釣るために穴をあげたり，流水部での海猟に携帯され，船の通路を作ったり，
足元の確保に使用したりすることが考えられる。
9) 大場（1950）は，骨鲱類が骨に埋葬されている例をもとにして，それらが森を掘った後に埋めたものとし
て埋葬されたと考えている。
10) 林田は，南方先史時代におけるブタ飼育の存在から，そこにおけるイモ栽培の可能性を考えているのであ
る。
11) オホーツク文化に関係する大陸諸文化の農耕具は明確でないが，それらは多くは木製であったのであろう。
164
オホーツク文化の骨斧・骨霊・骨鏡

そして、クジラ等の大形骨を手に入れられるようになって、初めて、骨製丁利へと転化したと思われる。勿論、骨製のそうしたものが若干見られる（Derevianko, 1975, fig. 9 2 9 参照）。

12） 雑穀類の収穫法については明確ではない。「筋鬼画帖」に見られるように、手でそのまま摘みをしたかも

13） 道東オホーツク文化における海猟狩猟文化としての性格の明確化により、女性労働としてのこうした生業を

維持することが困難になったことは、北方海猟狩猟民の民族例から推測されるよう。

引用文献（A. B. C順）

Boas, F., 1901, “The Eskimo of Baffin Land and Hudson Bay” Bulletin of the American Museum of


知里真志保, 1953, 『分類アイヌ語辞典』, Vol. 1.


〜104.

 Derevianko, 1975, Мокоскоес Палеоантропология Среднего Амура.

後藤 明, 1981, 「アラスカ周辺における先史漁勝技術の考察」, 『考古学雑誌』, Vol. 67, No. 1.

後藤 直, 1981, 「弥生文化成立期の朝鮮半島」, 『歴史公論』, No. 74.

林 英昭, 1969, 『アイヌの農耕文化』

同 上, 1967, 「アイヌの食料植物採集」, 『北方文化研究』, No. 2.

林田 重幸, 1971, 「猪と豚そして日本民族」, 『考古学ジャーナル』, No. 52.

池戸 登, 1943, 『遠東民族』

犬飼 哲夫, 1960, 「民族学的に見た北海道の野猪」, 『北方文化研究報告』, No. 15.

泉 幹一編, 1968, 『アイヌの世界』


加藤 健平, 1976 81, 「北方農耕覚え書」, 『どるめる』, No. 11 28.

菊池 徹夫, 1979, 『駄籍とオホーツク文化』, 『三上次男編』, 『紀伊国記念論集』

菊池 彰彦, 1976, 『オホーツク文化に見られる駄籍・女真系遺物』, 『北方文化研究』, No. 10.

同 上, 1978, 『オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連』, 『北方文化研究』, No. 12.

北長 保男, 1953, 『北海道根室半島トーサムポオホーツク式遺跡調査報告』, 『古代文化』, No. 24.

国分一地編, 1974, 『オンネネト遺跡』

江東農学院編, 1978, 『猪の一生』

Lattimore, O., 1933, “The Gold Tribe, “Fishskin Tatars” of the Lower Sungari”, Memoir of the


前田 主, 1974, 「オホーツク文化とそれ以降の回転式鉤頭の型式とその変遷」, 『東京教育大学文学部史学

研究』, No. 96.


守田 利道, 1906, 『満州地誌』（中巻）

西本 豊弘, 1978, 『オホーツク文化の生業について』, 『物質文化』, No. 31.

同 上, 1980, 『生業研究における石器・骨器の意味』, 『古代探査一満州各地の古産記念考古学論集』

大場 利夫, 1950, 『モヨロ貝塚出土の骨角器雑考』, 『考古学雑誌』, Vol. 36. No. 4.

同 上, 1955, 『モヨロ貝塚出土の骨角器』, 『北方文化研究報告』, No. 10.

大場 利夫他編, 1976, 『新井遺跡』, 『新井遺跡』, 『下』.

大塚 和弘, 1976, 『アイヌのキルタの諸系伝』, 『国立民族学博物館研究報告』, Vol. 1. No. 4.

岡崎 敏, 1973, 『像の木人』, 『日本民族と南方文化』.

Takami, Ch. M., 1975, Основные Проблемы Этнографии и Истории Нивхов.

末村喜男, 1950, 『モヨロ貝塚資料集』
On Bone-axes, -spatulas and -hoes of the Okhotsk Culture

Recently archaeozoological studies make clear the pig-breeding of the Okhotsk Culture of the Northern Hokkaido. Many bone artifacts, which are similar to hoes in form, are found in these sites. The analyses of these artifacts indicate they cultivated millets with these artifacts, which is supported by the ethnological and historical data.

The Okhotsk Culture of the Northern Hokkaido is characterized by pig-breeding, millet-cultivation and fishing. On the other hand, the Okhotsk Culture of the Eastern Hokkaido is characterized by sea-mammal hunting.